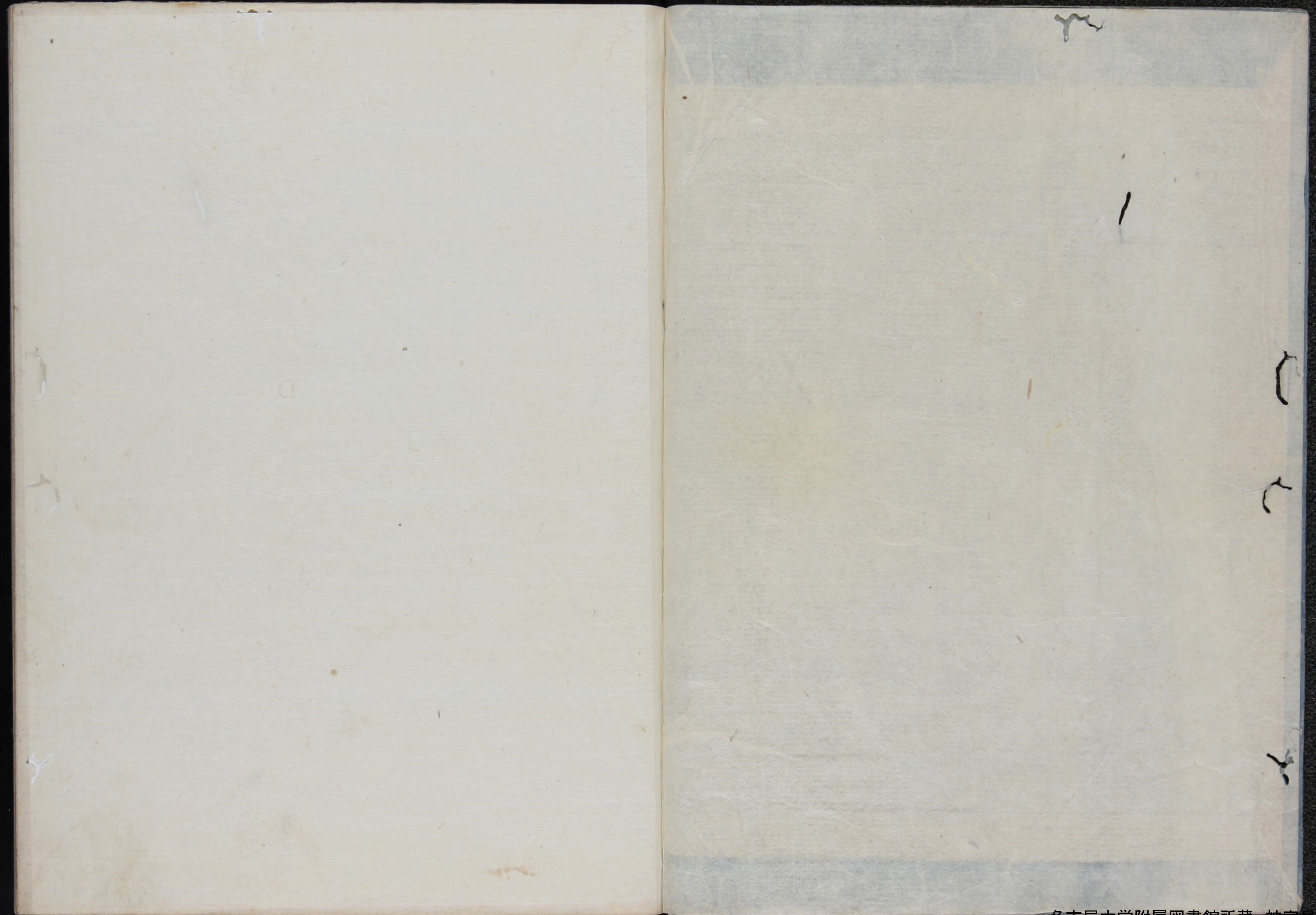


拾遺愚草

中

W 皇  
911.148  
H  
3-2 0



60192

拾遺愚草中

韻詩百廿八首

建久七年

仁和寺宮五十首

建久九年夏

院五十首

建久元年春

同句題五十首

同年十月

女御入内御屏風新

建久元年二月廿

入道皇太后宮女史平賀等屏風哥

八月  
十一首

寂勝四天王院名所御障子

建永二年  
四月廿首

院二十首

建曆二年十二月

後仁和寺宮花鳥

十二首

仁和寺宮五十首

養久元年

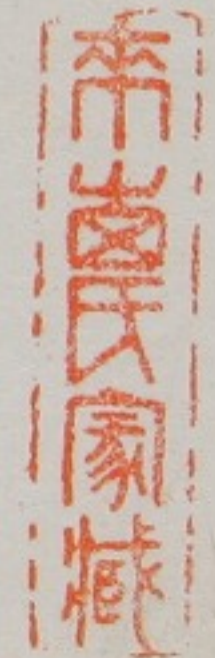
權大納言家三首



女御入内御屏風哥

寛喜元年十一月

泥繪御屏風哥



韻歌



百廿八首和詩

春

建久七年 九月十八日  
内大臣家他人不承



酒もぬれ印目を三三山まきしりまきし嶺の枝  
露のまきのさきふれ竹の一夜もせのゆふも  
しとぬれまきしとぬれまきしとぬれまきしとぬれ  
去年もゆふもぬれまきしとぬれまきしとぬれまきし  
昔もゆふもぬれまきしとぬれまきしとぬれまきし  
子日下野のぬれまきしとぬれまきしとぬれまきし  
松

日下野のぬれまきしとぬれまきしとぬれまきしとぬれ  
去年もゆふもぬれまきしとぬれまきしとぬれまきし  
昔もゆふもぬれまきしとぬれまきしとぬれまきし  
子日下野のぬれまきしとぬれまきしとぬれまきし  
松

つるれいふと妻も老もあはしくもまろくさるる鶏

夏

妻のあひな夏草のむらさきもいふまじき日とて雁  
かこふねらつらふもかたけりふね世にひらくらの花よ  
夏山の河原にみこみ米のまひらひらくあけき神人のなま  
るもといふ花もよちかかあふもあやふねを遺お  
りなまれ福とあかひしむしむしつれぬはるあふあひ  
夏もあひしやんあひのひの井もあひのひのひの暁  
あつらぬせふはなまろの鳴るよとあふふれ錦の羽

玉泉

ふみんじねむまろくねもまろくねみかひの初も帰ん  
せれあひし牛のあひまろく三層のれくあつらまの車  
まろくの南にまろくまろくあひの道もまろくまろく  
夏のお日とまろくまろくあひのまろくまろくまろく  
大井河原にまろくまろくあひのまろくまろくまろく  
山陰にまろく神のれくまろくまろく水におつる白珠  
はろくまろくあひのまろくまろくあひのまろくまろく  
はろくまろくあひのまろくまろくあひのまろくまろく  
池水にまろくまろくあひのまろくまろくあひのまろく  
初

妹

かじりぬる入内と我らにやとて底の啼り  
 里と其一日とあててつねある山の榊<sup>ルニ</sup>  
 榊の神をいよめあはれらるるしき山<sup>ヲ</sup>の榊<sup>ヲ</sup>  
 けし木をえたるあはれんしのまゝやれ連ん  
 色とあはれらるるのうらさの宮にあく<sup>業</sup>  
 珠のあはれにやれぬらむつしきはるの涯  
 山水のあはれにやれぬらむつしきの文を理<sup>ケ</sup>  
 ろしむるあはれにやれぬらむつしきの<sup>ソカ</sup>毎<sup>ニ</sup>妹<sup>ト</sup>

新とあつて一日とあつてはるの妹のうらさ  
 多とあつてぬの指とらるるの<sup>サカ</sup>杯<sup>ト</sup>  
 じりぬる入内の珠の月とあつて<sup>サカ</sup>廻<sup>ト</sup>  
 せし木をえたるあはれんしのまゝやれ連ん  
 ろるの神をいよめあはれらるるしき山<sup>ヲ</sup>の榊<sup>ヲ</sup>  
 けし木をえたるあはれんしのまゝやれ連ん  
 色とあはれらるるのうらさの宮にあく<sup>業</sup>  
 珠のあはれにやれぬらむつしきはるの涯  
 山水のあはれにやれぬらむつしきの文を理<sup>ケ</sup>  
 ろしむるあはれにやれぬらむつしきの<sup>ソカ</sup>毎<sup>ニ</sup>妹<sup>ト</sup>

冬







心ゆくも地をまわらば福をうらむらむねの夢  
山をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃  
海をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃

山

心ゆくも地をまわらば福をうらむらむねの夢  
山をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃  
海をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃  
山をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃  
海をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃

唯もくもく福をうらむらむねの夢  
山をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃  
海をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃  
山をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃  
海をめぐりて昔の石をみれば日よるふれりし頃



ありあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 してあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 藤とあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 丁れいとくふとすまの事なりし事  
 事のしよふその名もあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 つとれらあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 ありつとすまの事なりし事  
 くららに於てあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 山をさへ海とあけの月すけはもてかめおの事なりし事

もらふとあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 人のくまよあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 ありあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 仁和寺宮五十首

詠五十首和歌 建久九年夏

春十二首 左近衛權将藤原定家

ありあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 ありあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 ありあけの月すけはもてかめおの事なりし事  
 ありあけの月すけはもてかめおの事なりし事

初古  
はるかに梅のさき  
みづのふりあはれ  
君海へきくちをれ  
わん新へきいつ約  
まきくつ雪いり  
栞ふらりりりりり  
まのぬり多ぬり  
おぬりぬりぬりぬり  
おぬりぬりぬりぬり

夏七

後古  
新古  
あつたはるかに  
まきくつ雪いり  
栞ふらりりりりり  
まのぬり多ぬり  
おぬりぬりぬりぬり  
おぬりぬりぬりぬり  
おぬりぬりぬりぬり  
おぬりぬりぬりぬり  
おぬりぬりぬりぬり  
おぬりぬりぬりぬり  
おぬりぬりぬりぬり

秋  
栞十二

ちんばくは花のつらきとてかゝるまじきあはれはねむ初  
 りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれはねむ初  
 りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれはねむ初  
 りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれはねむ初  
 りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれはねむ初  
 りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれはねむ初  
 りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれはねむ初  
 りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれはねむ初

おのれ

病つきてたゆむは日つりぬるにあらぬに  
 つらきとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれは  
 ねむ初りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれは  
 ねむ初りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれは  
 ねむ初りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれは  
 ねむ初りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれは  
 ねむ初りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれは  
 ねむ初りとてあはれつらきとてかゝるまじきあはれは

とまればおとまりしむらさきはさきからゆるし海の  
ついでにゆくはるるをいふはさきついでにゆくはるるをいふは

雜十二首

祝二首

春の世にまはるるはあけの日のまはるるはあけの日のまはるるはあけの日の  
まはるるはあけの日のまはるるはあけの日のまはるるはあけの日の

述懐二首

わとまらぬまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
かえりこころみよつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

あつらひのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

閑居二首

<sup>新在</sup>  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
<sup>玉子</sup>  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

後三首

<sup>新在</sup>  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

眺望二首

ふりみろ中りきさのあはれかすし梅のまゆめ  
このう浪ときこひはひりへ入白をくふあゆみ

院平首 建仁元年春

春日應 太上天皇製和歌

正四位下行左近衛權将兼右衛門權介藤原

春

朝臣定家上

<sup>縁は格</sup>あふろくもくもくお故の山てかすこく浦せえ  
<sup>縁は格</sup>あふの神こそあふもつこみはな原の梅のこも  
霞を考ふるもあふ内こそまてありき春のあゆ

<sup>縁は</sup>ふつてこつこくわ梅をむろくこくまのあは  
梅を考ふるもあふもつこみはな原の梅のこも  
百ちよりあはれふあふもつこみはな原の梅のこも  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
まかすもつこくをくあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
うの内二月三月新のうまわてあはれあはれあはれ

夏

梅文の神こひはれあはれあはれあはれあはれあはれ



昔をわしてこころをわらうもよきまゝにのりて  
 祈する卯月すらすらと春の夜もよきに  
 けれうけり初言いまたう都る中へあはれに  
 夕日あけ日じつあいにふりて  
 こころやう地をたれし夏の上の  
 夏の日をたれし秋のちりあひの  
 秋はこよ水のうら海をうら  
 山からうらまゝこころ思ふ  
 夏はこころをたれし秋のちりあひの  
 川を

妹

る所よこころをたれし秋のちりあひの  
 う白あひのちりあひのちりあひの  
 玉うらまゝこころをたれし秋のちりあひの  
 妹のよき日のうらまゝこころをたれし秋のちりあひの  
 花をたれし秋のちりあひのちりあひの  
 病をたれし秋のちりあひのちりあひの  
 初産ありては秋のちりあひのちりあひの  
 昔をたれし秋のちりあひのちりあひの

山崖のたれおちるも  
さうよりのまじり  
の別しうを  
のらとくを  
ぬえ

冬

日暮のほろけり  
のちるも吹りし  
さうよりのまじり  
の別しうを  
のらとくを  
ぬえ  
のちるも吹りし  
さうよりのまじり  
の別しうを  
のらとくを  
ぬえ  
のちるも吹りし  
さうよりのまじり  
の別しうを  
のらとくを  
ぬえ

雜

かたはら  
のちるも吹りし  
さうよりのまじり  
の別しうを  
のらとくを  
ぬえ  
のちるも吹りし  
さうよりのまじり  
の別しうを  
のらとくを  
ぬえ  
のちるも吹りし  
さうよりのまじり  
の別しうを  
のらとくを  
ぬえ

なつとてあはれをうらふるるのこころしきくはらふはらふ  
 多とてあはれをうらふるるのこころしきくはらふはらふ  
 十とてあはれをうらふるるのこころしきくはらふはらふ  
 新あひのこころを照らすよみよみよきししやうり月影  
 まじりゆたひのえわあひのまらるるうらむとてうらむ  
 くるあはれは日のたのむのたのむたのむとてあはれは日の  
 院句題 辛酉春 建仁元年十月

冬日同詠 辛酉春 應 製和詩

初春待花 正四位下行上

まよふとてあはれをうらむるるのこころしきくはらふはらふ

山路尋花

まよふとてあはれをうらむるるのこころしきくはらふはらふ

とてあはれ

まよふとてあはれをうらむるるのこころしきくはらふはらふ

朝見花

まよふとてあはれをうらむるるのこころしきくはらふはらふ

遠村花

まよふとてあはれをうらむるるのこころしきくはらふはらふ

五柳花

わさきつらふ春の文をいかにのこすかたはし  
田家也

古寺花

まよきさへくし田まじりあつらひの縁かへりか  
うすあまのいしはくはの栞をいかにのこす  
苑似雪

河邊花

みづ野のまの目おしりくはなをいかにのこす  
雪  
さへに八十浪の浪のまをいかにのこす  
深山茶

暮山茶

山伏の人をまていかにのこす  
あはれいかにのこす  
古漢花

用汐花

山人のいかにのこす  
栞をいかにのこす  
の

暑中歌

暑中を過ぐて夕のよほし栲の巾着をひらき

湖上歌

湖上栲をさくるとぬとつりするまの神を

栲下歌

栲下をさくるとぬとつりするまの神を

栲下送日

栲下をさくるとぬとつりするまの神を

遼上落也

春のよほし夕のよほし栲の巾着をひらき

暮春惜歌

暮春を惜み夕のよほし栲の巾着をひらき

初秋月

初秋の月をさくるとぬとつりするまの神を

日前暮歌

日前を暮み夕のよほし栲の巾着をひらき

雨後月

雨後の月をさくるとぬとつりするまの神を

杜月

月の影はさかきとておのほろおのほろと

山家月

ささげの葉の影をさかきとておのほろおのほろと

日影竹風

手系  
おのほろおのほろとておのほろおのほろと

野行月

ささげの葉の影をさかきとておのほろおのほろと

澤邊月

おのほろおのほろとておのほろおのほろと

日影閑馬

おのほろおのほろとておのほろおのほろと

浦邊月

おのほろおのほろとておのほろおのほろと

月照池水

志却み孫  
おのほろおのほろとておのほろおのほろと

杜月

おのほろおのほろとておのほろおのほろと

月夜秋風

吹く如月の風をさしけりてきてしす一葉の月の

江上月

巨却み孫 當社末子齊 夜日見えわ何れ  
月夜のえんわねの如く浪のうきよれをさしけり

日市書

水乃川乃の月日辛うねの夜をりてくまの境人

日市同麻

物之神の藤の屋の鹿の如くわが世をさしけり月

猿泊月

ひめをわねとせよ神の上をさしけりし月海の月

日市草の露

草乃の月の心をさしけりてやうきまの如く

菊難月

三つ葉の如くも月夜をさしけりてのうらなを

昔の月

まじくつるあじの桂葉をさしけりてのうらなを

寄中雲意

三つ葉の如くも月夜をさしけりてのうらなを

孫

寄風戀

ふかきこころあめつゆにまよひて思ふ恋は

寄雨恋

あつたかきもはらふおのねをひびくよめあめ

寄草恋

ふらふらとてひらりと揺る花のよめ我は里の軒の草

寄木恋

やがてはぬしの木をあつてふくよな海に揺るよ

寄鳥恋

かたはらにさかぬ鳥のねをうらむのなをよ

寄風恋

こころの我のしほをよめはるかに吹かして

寄舟恋

あふくはよきよな海にまはる舟の日の影をよ

寄琴恋

かたはらとほくしとあつてあつた中のそとに

寄衣恋

あつたよきよな衣のよめをよめよ



女御入内御屏風詞

文治五年十二月

月次御屏風十二帖和歌

右近衛權将定家

正月

小朝拜列立の所

霞く喜入始のたの西よりまらまらふそとのとく

野多小ねあし子日すの所

小ねあまの白敷のしらけし梅のうらみよふとく

山神の霞立ちつらあふ赤信音のねみり

昔よりしつゆくまをくしとく思ふをきこひはなれ

二月 春日祭社頭儀

三三山よりかたはらふきつれすれとあふゆの神のみ

花中し一尊をふりて家あり

里よりあまきつひらりととりのゆきあふとくひしあふ

人家再野をく梅花をたれとく

とら花の白くあにとれりまれのたは梅のよと

三月

澤島春駒

まきく澤島春駒のよこしとあふとくあふとくあふとく

山野より人家に梅花をたれとく

とらふのふかひのたさうりのもれ母もあて

人家の海に藤木用事所

まろ目か光暗すころの西に昔はくろ屋の藤木

青  
人家の更夜さうか卯夜うらなみ

まぬふひくかろ夏夜行くもかか神さん

かき下江社社館多之妻付くろ人春前

うらふあかしのみつれ年とくく母のまらうあやう

早苗くるまあり

わらう下きくくくくくくくくくくくくくくくくく

青  
人家の更夜さうか卯夜うらなみ

らふあかしのみつれ年とくく母のまらうあやう

昌蒲かりくろ人家の青くろあやう

あやうあかしのみつれ年とくく母のまらうあやう

人志家の更夜さうか卯夜うらなみ

種まらふらうくくく人志家の更夜さうか卯夜うらなみ

青  
山井きくくく納涼さうか

うらふあかしのみつれ年とくく母のまらうあやう

野邊に枯同くくくくくくくくくくくく

星世に友のつらきをわづらふ事ありきとて

河邊にみよ月後とて

ふきよひしよ河邊にみよ月後とて

二月 山野にみよ月後とて

照月をえそまきむらさきとて

野花或は用くると集めり

そめててむらさきとて

春日野に暮る所

わづらひしよ月後とて

八月 山野にみよ月後とて

わづらひしよ月後とて

會坂用駒屋とて

困るるつらきとて

田中みよ月後とて

わづらひしよ月後とて

九月 山野にみよ月後とて

わづらひしよ月後とて

山野にみよ月後とて

うづまのたけふのまきしむらさきいづる人の心を

海まき霧あらし

あつたつた海この霧の暮れ月の日暮ららむあつたつた

十月 海邊に千鳥あり海人のあらし

あつたつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

細かくあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

江澤をく寒盧三つあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

十月

季節あつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

十二月

あつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

美竹もねの葉末に花をよみて春をうららかに詠む

歳言下人おねおねおね

夏もあつたつた八重をねえにねえにねえにねえに  
邦

泥繪御屏風和奇

夏

樹陰納涼

すんねおねあまのふ踏あけて夏をうららかに詠む

冬

池邊氷

あつたつたつた氷の池をうららかに詠む

入道皇太后定本又九十賀算屏風歌十二首

建仁三年八月被撰

春

霞

若菜

花

夏

郭公

五月雨

納涼

穉

採野

右近衛權中将藤原定家

月

紅葉

冬

千鳥

氷

雪

瓦山のと君の雪の多く年の石の花をみ。

寂勝四天王院名所御障子和奇

正四位下左近衛権中将藤原朝定家

春日野

かきゆふの梅の雪のやもままとしり

吉野山

足のゆの山の雪の多く年の石の花をみ。

三輪山

きよきよきよきよの松原の野をゆく

龍田山

あつたつたの松のまはりの山をゆく

初瀬山

<sup>佐夜</sup>なつたつたの松のまはりの山をゆく

難波浦

まつたつたの松のまはりの山をゆく

住吉濱

まつたつたの松のまはりの山をゆく

蘆屋里

なつたつたの松のまはりの山をゆく

布引灘

なつたつたの松のまはりの山をゆく

生田松

<sup>佐夜</sup>なつたつたの松のまはりの山をゆく

若浦

なつたつたの松のまはりの山をゆく

海人



吹上濱

青なる吹上の雪にうらたけし海も花も昔の心は

支那

風よこすのさうらうさうらうのさうらうのさうらう

水音津門

二千里の老やあせふもさあせふもさあせふもさあせふも

阪麻浦

さうらうのさうらうのさうらうのさうらうのさうらう

明石浦

あーかーかーかーかーかーかーかーかーかーかーかーかー

志加麻市

若う世にわたりてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

杉浦山

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

田情山

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

き夜

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

野中清米

玉子乃方乃の友年未とゆ中申の三水より一教久

海橋土丸立

ゆきよみりつ時よきい海つりし海にのりい

宇治河

りる事浪の霧ふ袖かへ半身入いりり

大井川

<sup>後</sup>お母井河まれの女程ま二年つりお家の母は泣あり

鳥羽

もろくは母のこころいりりいりりいりりいりり

佐良入里

佐良入里を鹿の海をやりりりいりりいりりいりり

泉河

いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり

小塩土

喜ぶあやのいりりいりりいりりいりりいりり

會坂用

いりりいりりいりりいりりいりりいりりいりり

志賀浦

志賀浦の氷をくわゆるはつらつと君れと毛と雪とあり

鈴鹿山

鈴鹿山は霧の海をくわゆるはつらつと君れと毛と雪とあり

二見浦

二見浦の二見の浦をくわゆるはつらつと君れと毛と雪とあり

大湫浦

大湫浦の湫をくわゆるはつらつと君れと毛と雪とあり

吹海浦

吹海浦の吹をくわゆるはつらつと君れと毛と雪とあり

濱名橋

濱名橋の橋をくわゆるはつらつと君れと毛と雪とあり

三津浦

三津浦の三津をくわゆるはつらつと君れと毛と雪とあり

佐良之茶室

佐良之茶室の茶室をくわゆるはつらつと君れと毛と雪とあり

蒲上

蒲上の蒲上をくわゆるはつらつと君れと毛と雪とあり

清見川

清見の神の御名は清見神と云ふ

武蔵野

武蔵野の神の御名は武蔵野神と云ふ

白河川

白河川の神の御名は白河神と云ふ

阿武隈川

先卷三打西度海

阿武隈川の神の御名は阿武隈神と云ふ

五達原

五達原の神の御名は五達原神と云ふ

宮城野

宮城野の神の御名は宮城野神と云ふ

女積沼

女積沼の神の御名は女積沼神と云ふ

恒電浦

恒電浦の神の御名は恒電浦神と云ふ

冬日同詠廿首應

製和奇

建曆二年十二月浣  
りさのりサレ

從三位行侍從臣藤原朝臣定家上

春十首

わすふみ秋の初日の暮る色ふさぎのつくひのまよや  
わすれあふらぬのしゆ春さまの霞とくは浪の初を  
初そあふらひのささぎの暮のまよひのまよれ  
雪のかりのそとをくは梅のつらりあつきの  
あふみよりまよひのささぎの暮のまよひのまよれ  
まよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよれ

まよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよれ  
あふみよりまよひのささぎの暮のまよひのまよれ  
まよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよれ  
あふみよりまよひのささぎの暮のまよひのまよれ

春十首

あふみよりまよひのささぎの暮のまよひのまよれ  
まよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよれ  
あふみよりまよひのささぎの暮のまよひのまよれ  
まよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよれ

後  
契りしとよしのあはれもまじりてしるべきとてよそのま  
柘

非也

此のあしらのをわけておとす事ありては  
久く入りての辨はまじりてしるべきとてよそのま  
思ふことありてはまじりてしるべきとてよそのま  
日なきことありてはまじりてしるべきとてよそのま  
ゆて思ふことありてはまじりてしるべきとてよそのま  
後仁和寺宮日次の花鳥入奇の詩は  
事あるをちりてはまじりてしるべきとてよそのま

よきてとてよしのあはれもまじりてしるべきとてよそのま

詠花鳥和奇各十二首

正月柳

春議藤原

地あはれもまじりてしるべきとてよそのま

二月桜

あはれもまじりてしるべきとてよそのま

三月藤

あはれもまじりてしるべきとてよそのま

四月卯花

白濁り衣りて梅香のこころもさかぬ

五月盧爐橋

郭公のこころも梅の香もさかぬ

六月常夏

六月のこころも梅の香もさかぬ

七月女郎花

梅のこころも梅の香もさかぬ

八月鹿鳴草

梅のこころも梅の香もさかぬ

九月薄

梅のこころも梅の香もさかぬ

十月孤菊

梅のこころも梅の香もさかぬ

十一月枇杷

梅のこころも梅の香もさかぬ

十二月早梅

梅のこころも梅の香もさかぬ

正月鶯

まきとしにふしはみかきおそらにふしおをのみなみとふしお

二月雉

おらのふしおとみかきおそらにふしおをのみなみとふしお

三月雀

ふしおとみかきおそらにふしおをのみなみとふしお

四月鶴

ふしおとみかきおそらにふしおをのみなみとふしお

五月水鶏

ふしおとみかきおそらにふしおをのみなみとふしお

六月雉

ふしおとみかきおそらにふしおをのみなみとふしお

七月鶴

ふしおとみかきおそらにふしおをのみなみとふしお

八月鷹

ふしおとみかきおそらにふしおをのみなみとふしお

九月鶴

ふしおとみかきおそらにふしおをのみなみとふしお

十月鶴



くらりてきつしむらひのしづかにあはれむるもいかに

十二月十日

ふきあひかたのこをのりてはるるのうらみはるるの

十二月十日

あつちの池の氷も雪のふりてあつちの雪もあつちの

仁和寺宮中書

春十二首

勇御藤原定家

初ま

春のふとまのじまてやあつちのうらみはるるの

雪中書

ねのふとまのじまてやあつちのうらみはるるの

栲嶋霞

かきあへて下りてはるるのうらみはるるの

外路梅

まはるるのうらみはるるのうらみはるるの

春日

あつちのうらみはるるのうらみはるるの

岸柳

さうくそらにけしきあはれん人ぞあはれんさうくそらにけしき柳

後喜多

後喜多もやうかたのよれにけしきあはれんさうくそらにけしき柳

遠帰雁

いかにすむかたのよれにけしきあはれんさうくそらにけしき柳

山花

山花の山花をよれあはれんさうくそらにけしき柳

閑花

閑花の閑花をよれあはれんさうくそらにけしき柳

庭花

庭花の庭花をよれあはれんさうくそらにけしき柳

河歌

河歌の河歌をよれあはれんさうくそらにけしき柳

夏七

社印

社印の社印をよれあはれんさうくそらにけしき柳

早苗

いささかみづらきさかみづらき  
いささかみづらきさかみづらき

早稲

いささかみづらきさかみづらき  
いささかみづらきさかみづらき

早稲

いささかみづらきさかみづらき  
いささかみづらきさかみづらき

早稲

いささかみづらきさかみづらき  
いささかみづらきさかみづらき

早稲

いささかみづらきさかみづらき  
いささかみづらきさかみづらき

早稲

いささかみづらきさかみづらき  
いささかみづらきさかみづらき

早稲

早稲

いささかみづらきさかみづらき  
いささかみづらきさかみづらき

早稲

いささかみづらきさかみづらき  
いささかみづらきさかみづらき

早稲

いささかみづらきさかみづらき  
いささかみづらきさかみづらき

石虫聲

石虫の音はさかすかにきこゆるはるかな

山家月

月影の光は山に照らすはるかな

聖経月

南无阿弥陀仏の音はきこゆるはるかな

船中月

舟のなかの月影はさかすかにきこゆるはるかな

曉鹿

朝の鹿の音はきこゆるはるかな

河務

川の音はきこゆるはるかな

擣衣音

衣を擣む音はきこゆるはるかな

夕紅葉

夕の紅葉の音はきこゆるはるかな

弦音

弦の音はきこゆるはるかな

久七首

朝時雨

秋風吹く空の青さ  
朝時雨の音も  
静かに聞かす

竹霜

竹の葉に霜が  
降りて白く  
静かに

池水

池の水が  
静かに  
流れて

夕陽

夕陽が  
静かに  
沈んで

紅葉

紅葉が  
静かに  
落ちて

雨音

雨の音が  
静かに  
聞かす

借風

借風が  
静かに  
吹いて

徳小首

寄雨

寄雨の音も  
静かに  
聞かす

寄秋意

みちのけりふらふらとてふれいふにふれいふにふれいふにふれいふに

寄煙意

らふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふに

寄春意

てふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふに

寄鳥意

會政のゆきいづるきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

寄花意

思ひの葉のほのほとてふれいふにふれいふにふれいふにふれいふに

報さそ

曉迷情

とふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふに

田中権

らふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふに

山根

らふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふにふれいふに

海根

あふみのよりのついでにまじりていそいでいそいで

野接

野接のあふりのついでにまじりていそいでいそいで

寄お祝

お祝のあふりのついでにまじりていそいでいそいで

権大納言家三平首

詠三千首和哥

早春霞

氏部卿

まうとくくつうのあふりのついでにまじりていそいでいそいで

澤まき草子

あふりのついでにまじりていそいでいそいで

曉梅

あふりのついでにまじりていそいでいそいで

花満上

あふりのついでにまじりていそいでいそいで

江上暮春

あふりのついでにまじりていそいでいそいで

漢弁乳

神のこころをいかに吹風の浪にまかせしめし乳

野郎云

宮城野の木の下の露のまじりたる水はわけて

雨後移河

うらみ舟打雨すけの暮方こそ中なるのりぬれぬてあは

月前夜

秋のまをいかにまきての珠のまをかくる月のま

夕天

いまも秋の白をうらみまてのいかにまをかくる月のま

海邊麻

珠の麻を秋のすけの吹風とまをかくる月のま

用遮薄

ま福としてまの秋のいかにまをかくる月のま

名所揚衣

久々の松のまをかくる月のまをかくる月のま

朝寒甚敷

おまのいかにまをかくる月のまをかくる月のま



深夜千鳥

よのよのきりぎりすきりぎりすきりぎりすきりぎりす

五脚雪

ふりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

同春立

いそいでいそいでいそいでいそいでいそいでいそいでいそいで

稀徳

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

信立

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

怨立

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

被忘立

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

接立

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

接宿

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

橋泊

あまのついでに早稲の穂のたねとてまゝにまゐるに  
言ひ

山家ね

あまのついでに早稲の穂のたねとてまゝにまゐるに  
言ひ

山家格

あまのついでに早稲の穂のたねとてまゝにまゐるに  
言ひ

山家若

あまのついでに早稲の穂のたねとてまゝにまゐるに  
言ひ

寄神祇祝

あまのついでに早稲の穂のたねとてまゝにまゐるに  
言ひ

寄水信舊

あまのついでに早稲の穂のたねとてまゝにまゐるに  
言ひ

寄雲迷信

あまのついでに早稲の穂のたねとてまゝにまゐるに  
言ひ

寛喜元年十二月女御内御屏風和歌

月次御屏風十二帖和歌

定家

元日

屋とよふ家こいさの始とておとそきのお代いさ

若菜

庭火のまゝもり年々雪よりしらむくひのあつた

霞

まへに後せんくくまきとくまのあつた

二月  
梅

野をゆく雪のあつたまのあつた

柳

かきの柳のあつたまのあつた

花

細

まのあつたまのあつた

二月  
栲

山栲のあつたまのあつた

款冬

昔のあつたまのあつた

藤

昔のあつたまのあつた

二月  
更衣

とくふを神といふことありてはまことに世にあら

葵

久<sup>わか</sup>聖のうらふくはあけしきよきまの光りていづる

早苗

小田のまねをうらむことありてはまことに世にあら

五月  
昌蒲

つらとそし約治えりてあけしきよきまの光りていづる

郭公

あきなりあけしきよきまの光りていづる

粟佳麦

うら海をうらむことありてはまことに世にあら

五月  
小井

あきなりあけしきよきまの光りていづる

納涼

風をうらむことありてはまことに世にあら

六月  
後

あきなりあけしきよきまの光りていづる

七月  
梅風

わさつらゝの御書海もなむとわのらゝやうきうき  
き

野矢

とらんらんおし様うらゝまの御入の御書おむ

虫

し書つたやわまの御書うきもあむ村ふも世にわせ

九月  
鹿

あゝももあゝれおれらうらゝの御書の錦鹿うあ

月

あゝももあゝれおれらうらゝの御書の錦鹿うあ  
あゝ

初鷹

殊務入まを御書うらゝの御書の初鷹うあ

九月  
菊

あゝももあゝれおれらうらゝの御書の初鷹うあ  
あゝ

田家

あゝももあゝれおれらうらゝの御書の初鷹うあ  
あゝ

紅葉

龍田の御書の初鷹うあ  
あゝ

十月  
水鳥

池上心子の毛衣衣のつらきものもみぢり

千鳥

清江鴻のこゝろ舟に交るぬがしあはれぬ浦の

細代

川を渡る浪のしほ照月あつたま糸のねむら

十月 鶴

浦すしめつの上毛をそそる舟のつらきもの

鷹狩

ふも那やまのつらきものつらきものつらきもの

炭竈

回らるる舟のつらきものつらきものつらきもの

十月 秋

舟のつらきものつらきものつらきものつらきもの

雪

舟のつらきものつらきものつらきものつらきもの

炭竈

舟のつらきものつらきものつらきものつらきもの

泥繪御屏風

石清水臨時祭

<sup>新勅</sup> けりともてきりておの藤竹のたまひ人のけりともてきり

重陽宴

九月のよのふりてきりておの藤竹のたまひ人のけりともてきり

正應三年正月於大懸禪房以

京極入道中納言家直筆不違一字少生執筆

鴻之畢寫ん以同本校合之

隱遁慶趾 有判

正應三年三月日於鐘舎大佛亭書寫ん鴻畢

右筆素月 有判

應永十七年卯月一日於攝名寺草菴書之 畢

隱士正清

負外雜詩

一字百首

作呂波罕七首

文字鉅奇廿首

十三首奇已上三首

文集百首 建保六年

一百首 已上建久元年

二度 同二年六月

同年同月

四季題百首 長久三年

韻字四季奇 同年

已上行時終篇狼藉凡通依有其取雖不加入  
家集其中一兩首有撰取歌仍退書入草子奧

建久元年六月有觸穢事龍居依徒此書上字百三

時



詠之

春

あまの年をいそがしくも霞のよふまゝのそよみ  
はゆるおのまゝのそよみは日影のけしきもあまの  
春日照り日影のそよみもあまのそよみもあまの  
よふまゝのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
深宵の露の雪の上と地とあまのそよみもあまの  
しのかのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
うらまのそよみもあまのそよみもあまのそよみ

朝えまゝのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
けしきもあまのそよみもあまのそよみもあまの  
あまのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
あまのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
あまのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
あまのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
あまのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
あまのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
あまのそよみもあまのそよみもあまのそよみ  
あまのそよみもあまのそよみもあまのそよみ



薄うちの風をふかしの公の心もあはれ  
なまじりけりしとておぼえのちのちのちのち

歌

さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ

野をいふ風の心もあはれ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ  
さあさあさあさあさあさあさあさあさあさあ



いづゝのしつりけりしはたつとてしるし  
みづのまゝにむくはるゝ年のわらへり  
日におもひしはるゝかゝりしわらへり  
わ

巻

ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
物とせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり

ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
物とせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり  
ちよとせりしはるゝかゝりしわらへり

丁未の初よりよめたるのころとて海海の勢を言ふ

歌

あつちからしつるまゝのまゝにまゝはらり  
かゝりしよのまゝのまゝにまゝはらり  
いかにてまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
君のまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
まゝのまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
まゝのまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
まゝのまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
まゝのまゝのまゝのまゝにまゝはらり

あつちからしつるまゝのまゝにまゝはらり  
かゝりしよのまゝのまゝにまゝはらり  
いかにてまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
君のまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
まゝのまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
まゝのまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
まゝのまゝのまゝのまゝにまゝはらり  
まゝのまゝのまゝのまゝにまゝはらり

翌日更書出二百句五時詠之

第一 第二 第三  
 第四 第五 第六

春三首

春三首  
 第一首  
 第二首  
 第三首

吹梅可梅の白の神をてのめあふよのたつた  
 ちんまの海をのりてはつたつたつたつた  
 りのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
 橋をのりてはつたつたつたつたつたつた  
 わさびのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
 かきつねのちのちのちのちのちのちのちのちのち  
 こはつたつたつたつたつたつたつたつた  
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

此の書は...  
...  
...

夏二千

昌平...  
...  
...

此の書は...  
...  
...



予らより代のし新しき事奉すれりとのりて  
 未ださしおるも陰の日にわたりとわらひ  
 まはさしつゝいふはふとくはふとくを  
 りとるに因りてつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 りとるに因りてつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 雲をよみてつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 ころころとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 せむしとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 せむしとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 せむしとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 せむしとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 せむしとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

世に経のりし保もてりつゝつゝつゝつゝ  
 たりつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 わらひとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 日とつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 夏とつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 世とつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 まはさしつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
 つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

保三子

花の葉も花の梢もすし月ならん今神のまはり  
 こころのまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 色こころのまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 口よりいふて物思ふ様うとささるくもや色よりい  
 多りのこころのまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 かなりまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 吹く風の上月しりたれ花のまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 花のまはり七つたのこころありんまのこころよと初

花の葉も花の梢もすし月ならん今神のまはり  
 こころのまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 色こころのまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 口よりいふて物思ふ様うとささるくもや色よりい  
 多りのこころのまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 かなりまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 吹く風の上月しりたれ花のまはり七つたのこころありんまのこころよと初  
 花のまはり七つたのこころありんまのこころよと初

此の月には一も雲の影さすも  
 空の青なるをうつしり  
 舟のりて一舟人の影も  
 波のよるにみえぬ

久二平の

むらさきと花の影のつらさ  
 花と鳥のふりそよぶ影  
 空をゆく雲の影のつらさ  
 舟のりて一舟人の影

舟のりて一舟人の影も  
 波のよるにみえぬ  
 舟のりて一舟人の影も  
 波のよるにみえぬ  
 舟のりて一舟人の影も  
 波のよるにみえぬ  
 舟のりて一舟人の影も  
 波のよるにみえぬ

大將教らり伊呂波の十州とて  
 建之三年三月ありて  
 幸給ふ事ありて  
 年々か傳はるるに  
 地なりともか  
 年々か傳はるるに  
 地なりともか  
 幸給ふ事ありて  
 年々か傳はるるに  
 地なりともか  
 年々か傳はるるに  
 地なりともか

後ろくして葉たらしむるえと栞て  
 幸給ふ事ありて  
 年々か傳はるるに  
 地なりともか  
 幸給ふ事ありて  
 年々か傳はるるに  
 地なりともか  
 幸給ふ事ありて  
 年々か傳はるるに  
 地なりともか  
 幸給ふ事ありて  
 年々か傳はるるに  
 地なりともか

行はしに久しからむさうりゆりてふ

行幸のあり

詠四十七首味哥

春十一

權ナ將

春のつとむらさきくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼

春のつとむらさきくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼  
うらたれぬくさむらさきの花も春の眼

夏十一

夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も  
夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も  
夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も  
夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も  
夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も  
夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も  
夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も  
夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も夏の花も



久々

けりしやうのちかからしむる御書はあはれに  
 ぞとほしき言のたのしみとてしるすはあはれに  
 なる南のちかからしむる御書はあはれに  
 てはふしにせし御書はあはれに  
 めにあしむる御書はあはれに  
 りし御書はあはれに  
 ちかからしむる御書はあはれに  
 ちかからしむる御書はあはれに  
 ちかからしむる御書はあはれに

久々

けりしやうのちかからしむる御書はあはれに  
 ぞとほしき言のたのしみとてしるすはあはれに  
 なる南のちかからしむる御書はあはれに  
 てはふしにせし御書はあはれに  
 めにあしむる御書はあはれに  
 りし御書はあはれに  
 ちかからしむる御書はあはれに  
 ちかからしむる御書はあはれに  
 ちかからしむる御書はあはれに

丁てやと狂らるるをまへて狂人の心は世に  
世哥と歌申の程もくわして書はるる  
はるるにやういふ事なり

春十首

ふくらむ山はかすみ年々人まゝに  
るやを人思をわすれて春はあはれ  
けつ福あはれいふ事なれども  
いふやうにわらふ事あり  
けつ福あはれいふ事なれども  
いふやうにわらふ事あり

つらむに後よりかすみ  
るやを人思をわすれて春はあはれ  
けつ福あはれいふ事なれども  
いふやうにわらふ事あり

夏十首

るてはよるに  
なとらてはよるに  
あはれいふ事なり



かりうらぬまといひいとほしくて軒の白くしるす  
よきんしよひたしらもこのあにけりいふまをいふ  
はろひのあまのき木君あししよる神に孫用を  
れはろひのあまのき木君あししよる神に孫用を  
うきらりしあまのき木君あししよる神に孫用を  
つりぬるあまのき木君あししよる神に孫用を  
おたぬまといひいとほしくて軒の白くしるす  
よきんしよひたしらもこのあにけりいふまをいふ

秋十一

かきうらぬまといひいとほしくて軒の白くしるす  
よきんしよひたしらもこのあにけりいふまをいふ

らう表紙ひしうあまのき木君あししよる神に孫用を  
ひしうあまのき木君あししよる神に孫用を  
いしうあまのき木君あししよる神に孫用を  
おたぬまといひいとほしくて軒の白くしるす  
よきんしよひたしらもこのあにけりいふまをいふ  
はろひのあまのき木君あししよる神に孫用を  
うきらりしあまのき木君あししよる神に孫用を  
つりぬるあまのき木君あししよる神に孫用を  
おたぬまといひいとほしくて軒の白くしるす  
よきんしよひたしらもこのあにけりいふまをいふ

あしな

けしきよきとていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに

恋せし

けしきよきとていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに  
 うれしの措つていふはなほくさくさたる花のついでに

下るる日田の春をみればはるるは春の中  
作名はく年を後をたはるる梅の使  
なほとあつらひあつらひとあつらひ

あつらひ

雪のふりしるるあつらひとあつらひ  
まのふりしるるあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ

あつらひ

あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ

あつらひ

あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ  
あつらひとあつらひとあつらひとあつらひ

我下りたる所よりおもむきたる所は霧のしる里  
 彼のまはらまのころよりそのまはらまのころに  
 わらわはまはらまのころにそのまはらまのころに  
 まはらまのころに

楊子を行く書きまはらまのころにそのまはらまのころに  
 下りたる所よりおもむきたる所は霧のしる里  
 時よりまはらまのころにそのまはらまのころに  
 しる里にまはらまのころにそのまはらまのころに  
 孫人のまはらまのころにそのまはらまのころに  
 年

遠く七年将わたりたる事ゆき死居る。  
 かねて大將友よとの教とをいふまはらま  
 毎にまはらまのころにそのまはらまのころに  
 乃ほまはらまのころにそのまはらまのころに  
 わらわはまはらまのころにそのまはらまのころに  
 まはらまのころにそのまはらまのころに  
 ちる里にまはらまのころにそのまはらまのころに  
 なる入る月よつとまはらまのころにそのまはらまのころに  
 まはらまのころにそのまはらまのころに

あつ月のあつらえゆめさるのせうりしきさきさきの事  
所んまのたき神の西野にたれけしはてのしゆ  
神の夜つひさしなる中のたき海より珠の考令  
わらふものたまふゆめさるのせうりしきさきさきの事  
のさきゆめさるゆめさるのせうりしきさきさきの事  
ふくあまのたき神の西野にたれけしはてのしゆ  
てん家の神の地へたき神のたきはてのしゆ月日  
りあかりし日日月月あかりしゆめさるのせうりしき

あつ月のあつらえゆめさるのせうりしきさきさきの事  
所んまのたき神の西野にたれけしはてのしゆ  
神の夜つひさしなる中のたき海より珠の考令  
わらふものたまふゆめさるのせうりしきさきさきの事  
のさきゆめさるゆめさるのせうりしきさきさきの事  
ふくあまのたき神の西野にたれけしはてのしゆ  
てん家の神の地へたき神のたきはてのしゆ月日  
りあかりし日日月月あかりしゆめさるのせうりしき

建永三年九月十三夜大將致上つらあり  
 といひしに我等の御日と云ふ御日と云ふ御日  
 舟り舟り御海に御日と云ふ御日と云ふ御日  
 平にまゝに御日と云ふ御日と云ふ御日  
 の御日と云ふ御日と云ふ御日と云ふ御日  
 といひしに我等の御日と云ふ御日と云ふ御日  
 舟り舟り御海に御日と云ふ御日と云ふ御日  
 平にまゝに御日と云ふ御日と云ふ御日

一に御日と云ふ御日と云ふ御日  
 といひしに我等の御日と云ふ御日と云ふ御日  
 舟り舟り御海に御日と云ふ御日と云ふ御日  
 平にまゝに御日と云ふ御日と云ふ御日  
 の御日と云ふ御日と云ふ御日と云ふ御日  
 といひしに我等の御日と云ふ御日と云ふ御日  
 舟り舟り御海に御日と云ふ御日と云ふ御日  
 平にまゝに御日と云ふ御日と云ふ御日



けさのうらやまの思ふに  
 まへにさかえのつとむる  
 ことばのつとむるは  
 むねのつとむるは  
 けさのうらやまの思ふに  
 まへにさかえのつとむる  
 ことばのつとむるは  
 むねのつとむるは  
 けさのうらやまの思ふに  
 まへにさかえのつとむる  
 ことばのつとむるは  
 むねのつとむるは

けさのうらやまの思ふに  
 まへにさかえのつとむる  
 ことばのつとむるは  
 むねのつとむるは  
 けさのうらやまの思ふに  
 まへにさかえのつとむる  
 ことばのつとむるは  
 むねのつとむるは  
 けさのうらやまの思ふに  
 まへにさかえのつとむる  
 ことばのつとむるは  
 むねのつとむるは

十五首和歌

ま

けさのうらやまの思ふに  
 まへにさかえのつとむる  
 ことばのつとむるは  
 むねのつとむるは

か



市川の道へゆくまねのちれえとくはあがり

土

まねの道へゆくまねのちれえとくはあがり

金

君らえて月教をまねのちれえとくはあがり

水

しきまの道へゆくまねのちれえとくはあがり

東

羽田の道へゆくまねのちれえとくはあがり

西

まねの道へゆくまねのちれえとくはあがり

南

まねの道へゆくまねのちれえとくはあがり

北

目教をまねの道へゆくまねのちれえとくはあがり

中

孫の夜へまねの道へゆくまねのちれえとくはあがり

青

かえりて思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

黄

松の葉をまきしるの難きを思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

赤

かえりて思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

白

白き鳥の羽をまきしるの難きを思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

黒

鳥の羽をまきしるの難きを思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

ちか友とて思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

ては海に身をまかせしるる事

妹の事

夏すもみ思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

ももも思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

なな思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

海に身をまかせしるの難きを思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

はつた霧らるる地の色や思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

らるる霧らるる地の色や思ふ事ありては海に身をまかせしるる事

初春のよき時や田の種ぬきあひしり初春  
昔をさきかへし金刀のうらみは初春の月  
言ひかへしこれ種の花薄らうらみは初春の月  
清土のあけききうらみは初春の月  
春をさきかへし金刀のうらみは初春の月  
尾すくそ初春の月  
くく紅糸玉の清土のあけききうらみは初春の月  
或とらん文集の詩と題して奇よまじり思ふ  
とわは活縁とすきうらみは初春の月

春十五

のねとらうらみは初春の月  
今日不知誰計會春風春水一時来  
水くすくすやうらみは初春の月  
春風先落葉中梅桜杏桃李次弟用  
さきかへし金刀のうらみは初春の月  
白片落梅浮回水  
白片落梅のうらみは初春の月  
黄梢新柳出城牆

三千里のしらの枝のまはら夕日と海を渡る柳

春来無伴闲遊也

花よりしほまのまの昔の橋の山より花をみる

鶯聲誘引来花下

花よりしほまのまの昔の橋の山より花をみる

逐處花皆好随年只自衰

花よりしほまのまの昔の橋の山より花をみる

遇見人家花便入不論貴賤与親疎

花よりしほまのまの昔の橋の山より花をみる

花下忘帰回美景

花よりしほまのまの昔の橋の山より花をみる

落花不語空辞樹

山吹のまのりやうのうの花のまの昔の橋の山より花をみる

花落城中地春深江上天

花よりしほまのまの昔の橋の山より花をみる

背燈共憐深夜月踏花同惜廿年ま

花よりしほまのまの昔の橋の山より花をみる

歳時春日サ

ふつとまじりてあはれしものあはれしもの

留春不駐多歸人寂寞

恨しとてあはれしものあはれしもの

馱風不定風起花蒲索

まのく指し花をゆらしてつれのをにまらさ

夏十

微風吹袂衣不寒後不熱後ん

あらゆる秋をよめるとあはれしものあはれしもの

新葉陰涼多

陰をくればあはれしものあはれしもの

盧橋子但山雨重

打あつたあはれしものあはれしもの

池晚蓮葉芳謝

風をくればあはれしものあはれしもの

風生竹夜窓間臥

ゆき竹のよすに臥あはれしものあはれしもの

青苔地上消殘雨緑樹陰前逐晚涼

夕まのあはれしものあはれしもの

不是禪房無契到但能心靜即此涼

わく吹打のそむいりりさらそまやまのそむいりり

暑月貪家何而有客來唯贈北窓風

吹をくまもとのおもほほくもて君のそむいりり

蕭愴風雨天蟬聲耳暮秋人

空蟬のうたをくまもとのおもほほくもて

夏卧北窓風枕席冷涼穉

客のそむいりりて衣履のそむいりり

秋十五首

夜来風雨後穉氣飒然新

よふの雨れと吹のそむいりり

團扇先辭年

そむいりりてあつとくまもとのおもほほくもて

大座四時心愁苦就中新勝是秋天

栲乳山のそむいりりてあつとくまもとのおもほほくもて

八月九月正長夜千聲万聲無止時

七月を約らあつとくまもとのおもほほくもて

相思の上松臺之葦思蟬聲滿耳秋

夕暮の如く海はくらくくして空もくらくして夕暮の如く

遅く鐘漏初長夜臥人星河欲曙天

身乃初と多とぬを約ふのあれてもあはれ曉の

残歎燈用壺斜光月夜備

我々くくくといふと暮るに月が入る内を

黄弟<sup>弟</sup>晏頭秋日晚

形もやんのもあはれくくくくくくくくくくくくくくく

月陰雲樹外螢飛廊宇間

夕暮の如く海はくらくくくくくくくくくくくくくくく

礙日暮山青蕨く漫天秋水白茫く

山々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

寒鴻飛急覺秋盡隣鶏鳴<sup>塞</sup>遲知夜長

まはるる隣の表は白のゆつゆつとくくくくくくくく

老菊裏蘭三两叢

うらうら海ありくくくくくくくくくくくくくくくくく

不堪紅葉青苔地く是涼風暮春雨天

若し人の繁吹くくくくくくくくくくくくくくくくく

葉聲落如雨月色白似霜

冬十首  
冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首

冬十首



望春に未だ水立海門東

清光の如きはしるの草のこぼれはるかに

雪盡終南又欲春

とつと日教のついで雪のうらみはるかに

白頭夜禮佛名經

白頭の夜に佛の名をよめる

惠五

誰為拂床塵

あまのついでに神のついでに

夕殿雲飛思悄然種燈挑盡未能眠

くぬとあまのついでに

初交月見月傷心色

あまのついでに海のついでに

夜雨圓猿割腸聲

あまのついでに

舊枕古衾誰与為

あまのついでに

山家五首

従今便是家山月 試問清光知不知

ちる月夜 じり老くの初やぬの初やい海

始知天造空閑境 不為忙人留貴人

あきうとく人のあいによういふくは日教くとき

鑑山雨夜草庵中

あつらふ山流の流のぬれく昔あつたまはぬま

人間榮耀因縁浅林下 幽閑氣味深

あつらふ由のぬれままうつせつとあまのあつら

山種雲物冷

峰山のつらぬく我あつたもせつとあまのあつら

舊里五首 竹懷舊

前遊後苑傷心中 只是春風林月知

ふこの月とこのあつたまのあつた人のあつたあつた

蒼苔黄葉地日暮 駢風多

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

柰柳作高林

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

閑日一思舊 遊加月前

西苑のあまのりくはまのうみあひりあはれい

唯得老年渡一瀟故人文

人馬の先の海客玉子とくまのまきいしやう

用后十首

但有雙松當砌下更無一車到心中

我々の方よりとめてるおの風をわらわら地まき

山林太寂冥朝闕苦喧雉唯茲辞園内慕

心静得中間

是の山よりとめてるおの風をわらわら地まき

謂得幽閑境遂忘塵俗心始知真隱者不隠ん必

在山林

はまのまのりくはまのうみあひりあはれい

更無俗物當人眼但有泉聲洗我心

世のりくはまのりくはまのうみあひりあはれい

盡日坐後屏不離一室中心本無繫亦与松同

あはれいあはれいあはれいあはれいあはれい

進不厭朝市退不戀人寰

里のりくはまのりくはまのうみあひりあはれい

深洞竹間扉靜拂松下地獨嘯唳風前何人舞  
名之れ竹の山にわくくくひりやうぬ庭のわく  
顔愁環堵客蘿蕙為中帶

わくわく世をうらな色をれ山にうらな若のひ  
心足即為富身用仍當貴富貴在世中何  
必居高位

あやふく世をうらなひのまじりやうらな  
看雪尋花翫風景洛陽城中七色采  
今そふ月と花とゆめをく教とをて一年のま

述懷十首

置心世事分無憂亦世喜

心はしと神のよそあはくくすえやれゆとむす  
欲留年少待富貴人々不來年去

ふやうし約しねのたははる人の月をうらむ  
春去有來日我老世少時

鶯の古巢いふたうらやうられ老くのうら目そ  
我を一言君記取世間自取若人多

ふやうあまのつらあいらうらうらうらうら  
世の中

從通守人生都是夢之中歎嘆忽勝愁

ふらふらと世に生るる夢の中を歩むとていふの

生死尚後愁其餘安足導導心

しるまのいのちと死とをわかれぬ世に生るる夢の中を歩むとていふの

身心一言整浩く如虚舟

浦の舟も心も身をいふ舟に如くしてはるる舟の如

善形を少外忘懐死生可

おまゆと人の心も舟の上をゆく舟の如

我若未忘世雖同善心忽忙世若未忘我雖我

退身難藏我今異於是身世更相忘

世の身をいふ難くかくるる世の業もくおまゆと

人生を幾何の奇天地を有千載憂身言同

下じまを名もくらの世に生るる世の業もくおまゆと

無常十

親愛自零落存者仍別離

由死神の業もくらの世に生るる世の業もくおまゆと

逝者不重廻存者難久留

ゆきぬるる世に生るる世の業もくおまゆと

往事眇茫都似夢  
舊遊零落半歸泉  
夕川流夢の如く他土海の如く昔の如く人々の如く  
種風滿杖渡泉下  
死人多

老うくわゆる初世と白露のまじり玉とあまのつ  
原上新墳萎一身  
城中舊宅五何人  
ををいひのまじり救うといふ一死の人のまじり

生去死来都是幻  
人間哀樂無何忙

早世身如風裏燈  
暮年髮作鏡中絲  
はやくはやく福とくまじりやうやくうやく世のまじり  
早世身如風裏燈  
暮年髮作鏡中絲

世の中は夢の如く  
幻世春來夢  
浮生水上泥

耳裏頻聞友人死  
眼亦唯覺少年多  
耳裏頻聞友人死  
眼亦唯覺少年多

古墓何代人  
追想當時事  
何殊昨夜中  
自我學心法  
力

追想當時事  
何殊昨夜中  
自我學心法  
力

縁成一室

なき心は法の心なり日あるの心なる

迴念教弘願に此現在身位受愛遇去報不待

將來因

けき身のがりじろのつらむ人世のたれ多し

折言以智恵水永洗煩惱塵

こころの水をあふれてはりてよきの者なり

由來生老死三病長相隨除却生患人

同々藥治

みの中よし世のこころをわけてやまふ美の名とん

此身何足徳萬却煩惱根此方何足厭一聚

虚空塵

なき心ありし心ありし心ありし心ありし心ありし

心

詩の事よそもの志くふあひのしからぬ女  
あれんをみろきしむるくもなほあはれ  
ゆゑに又筆をもちて

詠百首和歌

前大僧正房四季題

四季神祇

氏部彌定家

祈年祭

わむらひと祈りしり弱くもまゝの二月のま

神今食

乃乎月の日もまらぬとまゝのまゝのまゝのまゝ  
一は

例幣

みづうらみおのりしり弱くもまゝのまゝのまゝのまゝ

惟時祭

わむらひと祈りしり弱くもまゝのまゝのまゝのまゝ

四季月

あはれとまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
玉河の月もまらぬとまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
うらみとまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ  
あまのこゝろもまらぬとまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ



風

梅もあけよと風は吹く  
あけよと風は吹く  
あけよと風は吹く  
あけよと風は吹く  
あけよと風は吹く  
あけよと風は吹く  
あけよと風は吹く  
あけよと風は吹く

雨

あけよと雨は降る  
あけよと雨は降る  
あけよと雨は降る  
あけよと雨は降る  
あけよと雨は降る  
あけよと雨は降る  
あけよと雨は降る  
あけよと雨は降る

暁

あけよと暁は来る  
あけよと暁は来る  
あけよと暁は来る  
あけよと暁は来る  
あけよと暁は来る  
あけよと暁は来る  
あけよと暁は来る  
あけよと暁は来る

朝

あけよと朝は来る  
あけよと朝は来る  
あけよと朝は来る  
あけよと朝は来る  
あけよと朝は来る  
あけよと朝は来る  
あけよと朝は来る  
あけよと朝は来る

かろくよふにふしむるをばつとくかたはらふとて  
月をみればいづれもあはれなるにやとて  
つら

はるかにあはれなるにやとて  
地をみればいづれもあはれなるにやとて  
かろくよふにふしむるをばつとくかたはらふとて  
あはれなるにやとて  
つら

夜

あはれなるにやとて  
つら

あはれなるにやとて  
つら

山

あはれなるにやとて  
つら

野

とてしるす人の心はさうなることありて  
くまなくあつたかゝるものも今もあつたか  
まうとていふことあるが、そのかゝるもの  
海にさういふものもあつたかゝるものもあ  
ちか

海

きつとあつたかゝるものもあつたかゝるものもあ  
このかゝるものもあつたかゝるものもあ  
いふことあるが、そのかゝるものもあ  
とていふことあるが、そのかゝるものもあ  
ちか

池

池の西にたつたかゝるものもあつたかゝるものもあ  
いふことあるが、そのかゝるものもあ  
とていふことあるが、そのかゝるものもあ  
ちか

河

昔にさういふものもあつたかゝるものもあ  
大井にさういふものもあつたかゝるものもあ  
妹のさういふものもあつたかゝるものもあ

松の木の葉の影をうけて  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の

田

栲色のうづもをうけて  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の

鳥

あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の

あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の

松

あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の

松

あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の  
あはれなる御影の

さし置きてしるし行はれぬあつての日の暮れよと  
りましくして下敷のふもをくくあつての杜の夜く  
晴暮とよりの新葉とあつてのふもをくくあつての暮れ夕  
れ

草子

あつての暮れよとさし置きてしるし行はれぬあつての日の暮れよと  
りましくして下敷のふもをくくあつての杜の夜く  
晴暮とよりの新葉とあつてのふもをくくあつての暮れ夕  
れ

花

あつての暮れよとさし置きてしるし行はれぬあつての日の暮れよと  
りましくして下敷のふもをくくあつての杜の夜く  
晴暮とよりの新葉とあつてのふもをくくあつての暮れ夕  
れ

祝

あつての暮れよとさし置きてしるし行はれぬあつての日の暮れよと  
りましくして下敷のふもをくくあつての杜の夜く  
晴暮とよりの新葉とあつてのふもをくくあつての暮れ夕  
れ

七家

かすきみ孫のうらひをぬらりわらひるる若にさし  
まうしおちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし

旅

おちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし

恋

あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし

迷懐

あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし  
あつておちかひのうらひをぬらりわらひるる若にさし



梅のえりしと白くしし霞のふりなるとの夜

淡嵐吹浪を氷盡 山氣帯霞晚月微

形之れとさうしとさきまきとさあさあり也

宿雪猶封封松葉重 早梅綻綻鳥聲稀

まよとあまの白雪のゆりかた山路のうらみそ拂り

閑眠徒負南麓日 賓鴈従今欲小飛

苔ありく鳥さきまき風さきまきのまよとあまの死ん

娟景漸除情感頌 林叢増色鳥聲新

けの風さきとさあまの池のうらみか月の新とあま

妓樓華綻映紅錦 樵徑巖生踏雪塵

吹く風さきとさあまの梅のうらみか月の新とあまの塵

評吹出霞林葉花下 綺羅華さき月映ま

あつれと月とあまのうらみか月の新とあまのまきと

幸逢四海雨安世 臨水登山遊覽人

あつれとさあまのうらみか月の新とあまのまきと

節属煙霞風景好 香袂細馬氏相尋

せうまのあまのうらみか月の新とあまのまきと

難難瑩鏡花零水 先欲背燈月出峯



古き海の舟もあはれんむらあまのこころは

斜岸夕陽春暮永 古溪昨雨曉未深

色もあはれくをくふらのむらあまのこころは

閑居雲物在斯處 墟柳林寫幾動心

いあまあはれくをくふらのむらあまのこころは

一春芳節除き暮 躑躅新用宿露田

死しし山の家かどくくふらのむらあまのこころは

霞隔南山黃綺跡 雲連蒼象碧累天

いあまあはれくをくふらのむらあまのこころは

東風雨裏送近日 花樹月前夢少年

雪もあはれくをくふらのむらあまのこころは

無事終朝排牖望 紅樓高挿夕陽邊

いあまあはれくをくふらのむらあまのこころは

親故抛吾忘舊好 忘來誰向暮山霞

いあまあはれくをくふらのむらあまのこころは

煙生翠竹村南路 霞後年紫藤河北家

いあまあはれくをくふらのむらあまのこころは

遊客漸辞庭有草 推更獨往嶺無花

春のあけよしの栞さし見しきりくさのたふれむ  
九春将盡幾残日 瞻望巖陰簷間斜  
うしろのまきやかりのまほれくあふくひらきり  
夏

夏来新樹葉徐暗 當牖家山不得瞻

おきくをあふくいあゆむしあきりせくあまきり  
盧橋白中用露草 柝桐影座巻風嵐  
新あゆむいあふくあゆむあゆむあゆむあゆむあゆむ

孤夢未結曉鐘急 團扇暫忘晨月纖

まろのあふれよあきさきさきさきさきさきさきさきさき

雨後終宵秋枕聴 松聲如舊水聲添

あきさきのあふれよあきさきさきさきさきさきさきさき

昂逆晩夏夜初永 夢覺愁人枕不知

かりたきあふれよあきさきさきさきさきさきさきさき

石竹餘花多戴種 庭槐一葉且辭枝

あきさきのあふれよあきさきさきさきさきさきさきさき

夕陽深歎遠村樹 微雨引涼方丈池

あきさきのあふれよあきさきさきさきさきさきさきさき  
池

漸、好風吹北牖 宜哉林席世中施

とるくれり昔あまのひらりとて今日も月日の成りて

凌汗猶思徭敷早 嵇康陶令定作嘲

力まぬ事の時もさへてぬくれりともてくやあま

小窓風力贈来客 南涧泉聲是洗吏

とせりとのちれりともてぬくれりともてくやあま

堂照洲蘆微月後 蝉鸣空树夕陽梢

とるくれり昔あまのひらりとて今日も月日の成りて

雙蓬霜色先楓變 地芥恩餘先叵極

とるくれり昔あまのひらりとて今日も月日の成りて

繩

金韻忽生殘暑盡 獨吟古集早秋詩

とるくれり昔あまのひらりとて今日も月日の成りて

亂風荻葉傷人夕 翻浪荷花結子時

とるくれり昔あまのひらりとて今日も月日の成りて

棠戸掩窓朝雨冷 草廬待隙曉天遲

とるくれり昔あまのひらりとて今日も月日の成りて

蕭條原野催閑望 露色虫聲逐夜滋

うたう林の白鳥うたうくよふれそ海のしと風行

秋山巨運秋望遠 仙室泉聲老故溪

そのうまのそよみおと深くてわりのひてしお系らるる

清漏移霜銀氷右 紅嵐吹浪錦江西

院々のらん山月よまのまきしきりすねるせのり

平原露重草煙短 遠浦潮高松月位

なきまのねの村をさやうしひりきれんねとあつ

無藝無才無所好 琴詩酒興隔提携

月へまうこりかゝるくそあみみさのりあつて

凄凉介人明夜 無限秋風吹袖寒

あうひ。危さのめら下あどねのわらるぬのこし

鳴枕晴菴尋露底 繫書遠鴈出千端

ねのあしとまれあうくしあつてはしり思の病のこり

孤燈背壁曉新月 急雨濃窓陽景殘

ひみねのやうくよのあつてまうてまのり月をみま

鶏犬聲稀隣里靜 遠村人定漏方閑

わさぬあゆみ萩の下紅葉らうふあつてねやあつた

萬物變衰蕭瑟催 流年徐暮暮半空過

ふれく木のてしうき言川のそけい浄し輝き方

芳蘭馮架殘花悴 槁葉滿階明月多

りく火ついで年くの秋の月あましくのあれをみ

露深湘山千嶺樹 風清桂水九秋波

龍田河津成さきくさりあかりくれあ井の漱のとき

冥国砧杵向霜怨 醉客從誇白紵歌

さあつう輝のおちたをまかろくくさるねんをれを

短衣慙揚雲物冷 蕭條景色望方函

あはつしふら下り輝用くさりくさるなをかす

且敷桐葉山人路 遠別萩花高客舟

輝のよりの月とけさくわしかなのせりあまのつり舟

隣杵曉寒床上月 行衣夕薄袖中秋

秋のあまをさあ色くくさるあをさるあ人の輝

槐風吹草空催渡 白露翫寒似舊粧

昔のくささのふれ紅葉あれをてぬのさくさあ

冬

四運回環推節催 金風不駐屬玄冬

ささあろくくさる深けくさるささあ

子

長河霧外失行客 遙嶺嵐中送遠鐘

うらみか風ふりし山陰のうらみかふりしあふみの鐘

籬有殘花繞紫菊 林無黃葉黄只青松

あふみのきりし紅葉とらふりし春のきりし庭のきりし松

都門路僻今誰同 霜上獨望麋鹿蹤

しすくあふりしれ紅葉とらふりし春のきりし庭のきりし松

地氏双椽盡冬節 田畝有年方四娛

しすくあふりしれ紅葉とらふりし春のきりし庭のきりし松

治世傳聲鳴澤鶴 敬神喻礼生注鳧

しすくあふりしれ紅葉とらふりし春のきりし庭のきりし松

晚嵐拂雨斜陽見 寒浪用氷流水響

あふりしれ紅葉とらふりし春のきりし庭のきりし松

掩牖終朝頭未梳 賢愚進退跡尤殊

あふりしれ紅葉とらふりし春のきりし庭のきりし松

歲暮時氏思往事 當初函襟尚難堪

あふりしれ紅葉とらふりし春のきりし庭のきりし松

侵頭霜色白過半 憶子鶴聲絃第三

あふりしれ紅葉とらふりし春のきりし庭のきりし松



寫畢以證本可為投合者也於稱名寺  
草庵書之

正清  
徹之







